

現代と子ども・若者との「共生」 ～排除する社会の消滅と包摂する社会の創造～

長谷川俊雄

子ども・若者の生きづらさ

保健所と精神科クリニックに勤務するソーシャルワーカーだったとき、統合失調症の若者たちと激論をかわしたりいっしょに旅行に行ったりと、かなり立ち入った関係のおつきあいをさせていただいたことがあった。彼らは、病いを手にして、それまで手に入れてきたものを失うことに悲観しながらも、なぜだか清々とした表情をすることがときおりあった。それはどういうことなのかと不思議に感じていた。しかし、地域作業所でお茶しているとき、ふいに合点がいく体験をしたことがあった。彼らは競争と評価の戦場である社会の最前線から、病いを手にしたことで、言い訳する必要性もなく、ある種の生きづらさから解放されているのかもしれないと感じた一瞬があった。ソーシャルワーカーとして彼らに社会復帰を支援する役割を持ちながらも、彼らの社会復帰は本当の社会復帰なのかと疑い深くなっていた時間が続いた。そして、社会が呼吸困難になって窒息しないような本来の社会へ向けて復帰すべきではないかと考えていた。

そして、10数年前から、不登校・ひきこもり・アディクション・家庭内暴力・非行・精神病・発達障害…、生きづらさに直面して、なおかつ医療・保健・福祉・教育・家

族・地域からもこぼれ落ちて、結果として排除されて行き場のない子どもや若者たちと出会ってきた。彼らとの出会いとつきあいから教えられてきたのは、その生きづらさは自分の人生としてあきらめながら受け入れるのではなく、社会的な解決が必要な社会問題であると認識することであった。子どもと若者から冒険心や希望や回り道することを収奪することに成功している社会に未来はないだろう。社会に飼い馴らされた子ども・若者を奪還するために必要なものは、〈出会い〉と〈つながり〉と〈自己肯定感〉を育むことができる「居場所」である。大学が、研究室が、ゼミが「居場所」として機能するかどうか…。

「問題」の捉え方

確かに、子どもや若者の身の上に大人が言う「問題」が起きている。しかし、それは表面的に眺めたときの理解の仕方である。「問題」を分け入ってよく見ると、子どもや若者たちという存在が「問題」なのではなく、誰もが生きづらい社会状況のなかで、子どもと若者たちは自分が自分を生み出す第二の誕生期ともいえるべき思春期に、抱えきれないほどの悩みや困難に直面している現象として捉えることができる。それは、この社会が「多様な価値や存在形式を認め

ない」という硬直さと不自由さに固執していることを、言語的に非言語的に、明示的に暗示的に、直接的に間接的に子どもと青年たちに強要していることによって、あるいは生きていく上で自らの意思や感覚に反して身につけざるを得ないことによって、そうした現象や状態を生み出しているように思われる。子どもと若者たちは、現代の社会状況と構造に規定・影響されながら、第二の誕生期である思春期・青年期の“陣痛”として自分自身の生命や生活をかけて“自己表現”しているのではないだろうか。

当事者性の確保

子どもと若者たちが直面している悩みや困難を大人が解決してしまうことは、子どもや若者たちから自ら解決すべき課題を奪うことになってしまう。子どもと若者たちの当事者性を尊重するために、どのような工夫をしたら良いのだろうか。この問いは、子どもや若者たちをどのように見るのかという子ども観・若者観が大人に問われていることにつながっている。子どもと若者たちを、将来の日本経済に貢献できる健全な労働力として期待することや、犯罪加害者にならないように「問題」のない市民として成長させることを期待することだとしたら、それはその人の人間としての独自性と可能性を封殺することになってしまうだろう。思春期（青年期を含みつつ）は大人への成長過程の一段階（ライフ・ステージ）としてだけ理解されるのではなく、思春期における自らの誕生という大事業に取り組んでいる一人の人間として、大人や社会は尊敬を持って見守り迎えることが必要では

ないだろうか。「生みの苦しさ」を大人の考え方ややり方によって、子どもと若者たちから奪うことは、子どもと若者たちがいつまでも自分に出会う機会を奪うことになり、独自性と可能性を試すことができる誰のものでもない自分自身の人生を手にするのを不可能にさせることを意味している。「べてるの家」（北海道浦河での精神障害者の地域生活実践）が大切にしている「苦労を取り戻す」という当事者とサポーター（支援者）の実践活動から学べることは、子どもと若者たちの悩みと困難を大人や社会が予防や回避をするのではなく、しっかりと子どもと若者たちが自分自身の課題として位置づけた上で、その課題を解決するための取り組みを保障していくことが、大人や社会にできることである。しかし、それは子どもと若者たちをただ放っておくことではなく、また孤立させておくことでもない。大人や社会に求められているものは、“過剰な”サポートではなく、むしろ“いい加減（適切）”なサポートなのかもしれない。

コントロールではなくサポートを

同じ時代を、同じ社会を生きる「生きづらさ」をともに直面している大人として、子どもと若者たちに迷惑や余計なお世話にならないように、何かできることもあるのではないだろうか。もちろん、そこで必要になるのはサポートであってコントロールではない。しかし、この二つを見極めることは簡単そうでありながら、実はとても難しいことである。時代の推移と変化の速さは、一世代のあいだでも大きな隔たりを生んでいる。そのことを踏まえると、大人の

価値観にもとづく善意に満ちた単純な働きかけであっても、それは子どもと若者たちに届かないことは明らかだろう。わからないことをわかるようにするためには何が必要になるのだろうか…。その答えは、ひょっとしたらひどく簡単で単純なことかもしれない。子どもと若者たちに教えてもらうこと、子どもと若者たちといっしょに取り組むこと、そうしたことによって可能になるかもしれない。

コントロールではなくサポートであるためには、大人たちと社会がバリア・フリーとともにバリュー・フリーを指向することが求められているように思われる。実は、そのことは子どもと若者たちに限られることではなく、大人が自分自身に出会い自分を大切にできるために必要な新たな契機になるかもしれない。

せつない関係性の解消

現代社会に彗星のごとく登場した社会的ひきこもり問題に関して話題や議論となる一例を出してみよう。外出できることや就職することを社会的ひきこもりのゴールだと考えている人は多い。しかし、今までの援助活動のなかでは外出や就職が社会的ひきこもりの解消やゴールにならないことは、多くの本人や家族から教えてもらった。それ以前に、そもそも社会的ひきこもりのゴールは当事者である本人のみが決定できることであり、家族がそのゴールを設定することはできないはずである（当事者性と他者性）。しかし、社会参加のイメージが社会的に強制されたり、あるいは拒否することを許されずに受け止めざるを得ない状況で

は、本人と家族は“根拠のない確信”つまり「社会参加」イメージを手にしてきたのであろう。家族と本人、そして取り巻く社会が共通して持つ「…ねばならない」「…あるべきだ」(must、should)という“根拠のない確信”に呪縛されながら、家族と本人が勝敗のつかないエンドレスの綱引きをしているように見えてならない。そして、その綱引きを社会はどのような立場や態度で傍観しているのだろうか？ 勝負のつかない綱引きは、具体的な結果や成果を手にできないばかりか、双方が疲労困憊することによってともに無力化(powerlessness)していく。そうした関係性は「せつない」関係性と言えるだろう。そして、その「せつない」関係性を家族と本人にだけ担わせ続けることは、あまりにも過酷でアンフェアではないかと強く感じている。

共生への歩み

そうした「せつない」関係性を生み出しているのは一体何か、そして誰なのか？ 維持・強化させているものは何か、そして誰なのか？ 社会的ひきこもりの名づけ親は精神科医の斎藤環さんである。しかし「社会的」という言葉を積極的に位置づけて説明されていない。社会的ひきこもりの「社会的」という言葉に注目してみたい。そうすることで社会的ひきこもりという問題は、本人や家族の上に現われているけれども、それは個人的問題ではなく社会問題として理解することを可能とさせるのではないだろうか。そのように理解しようとするときに、同じ地域・社会に生きる私たちも、その人のその家族の個人的問題として傍観す

るだけではなく、具体的に取り組める可能性を手にすることができるかもしれない。しかし、そうしたとき、第三者としての私たち（援助職や市民など）が配慮や留意をしなければならないことがあるように思われる。それは、私たちの「良かれ」という理解や働きかけが、本人や家族にとって迷惑や暴力になるという可能性である。どうも、私たち自身の生き方や社会観、つまり価値観・倫理観をまず問うことから始めることが大切になるように思われて仕方がない（value free）。

「生きること」を脱構築することを志向しながら、緩やかに柔らかに、社会の小さな変革を夢見ながら、ささやかな歩みを踏

み出すことにしよう！「共生」をめざした一歩を、あなたとともに…。

参考文献

- ・ 斎藤環 1999 『社会的ひきこもり』 PHP 新書
- ・ 浦河べてるの家 2002 『「非」援助論』 医学書院
- ・ 土井隆義 2004 『「個性」を煽られる子どもたち』 岩波ブックレット
- ・ 西野博之 2006 『居場所のちから』 教育史料出版
- ・ 長谷川俊雄 2008 「『自立』を迫る社会と若者の生きづらさ」『現代のエスプリ 483 青年期自立支援の心理教育』 至文堂

著者プロフィール

長谷川俊雄 (HASEGAWA Toshio) 文学部 (社会福祉学科) 准教授 社会福祉援助技術論・保健医療福祉論

1956年、神奈川県湘南で生まれる。楽しいことがあったときも、悲しいことがあったときも、いつだって湘南の海を歩いていた。寄せる波音、江ノ島の姿、後方へ転じると富士山や箱根の山。海と山を眺めながら育つ。公務員試験に合格していた4年生の秋。後輩の依頼を受けて身体障害者療護施設へ、軽い気持ちではじめての施設ボランティアに参加する。入所者である同年齢の重度重複障害者のS君と出会い、足元がぐらぐらとゆらぐ。

結局、公務員の道は選択できなくなり、「今、ここで」の人権保障の仕事である社会福祉に目覚める。他大学の社会福祉学科へ編入して卒業。1981年から、横浜市役所の社会福祉職として現場でソーシャルワーカーの活動が始まる。最初の職場は「ドヤ」街の相談所。見るもの・聞くもの…、すべてが驚きに溢れていた。社会の矛盾が折り重なって眼前に展開する日々。義憤を感じるが自分の小



ゼミ合宿：川崎市子ども夢パーク&フリースペースえんにて

さな力も認識する。若さにまかせた仕事中心の生活を送った。その後は福祉事務所と保健所に勤務。ここでも泣き笑いの濃い時間を過ごす。社会の矛盾がどうして個人の生活と人生に表現されて、自分の幸せを追求することを阻害されるのだろうか。あるいは断念しなければならないだろうかという大きな現実にはぶつかる。利用者や住民といっしょに地域作業所づくり、グループホームづくりをとおして、地味ではあるけれども少しずつ社会を変えていくこともできることを経験する。横浜市役所を辞して精神科クリニックへ転職。精神障害者やアディクションの患者と家族、そして不登校やひきこもりなどの思春期・青年期の「生きづらさ」の問題、家族であることが「苦しい」という言う人たちが予想をこえて多いことに驚く。また援助職の求めに応じてスーパービジョンを始める。援助職が「助けて！」と言えるところの重要性と必要性を痛感する。もっぱら家族臨床と精神保健福祉の仕事に熱中する。働きながら大学院に進学。院生生活は楽しくもあり、苦しくもあり…。大学教員に転身して5年が経過した。しかし現在でも、数ヶ所で相談、グループワーク、スーパービジョンを行なうソーシャルワーカーとして活動を継続している。大学教員としてよりもソーシャルワーカーとしてのアイデンティティが強い。30年近いソーシャルワーカーとしての歩みは順風満帆だったとは言えない。しかし、この職業を選択して後悔はしていない。燃え尽きの経験をして、なぜそう言えるのだろうか…。それは、そうした挫折体験があったからこそ、自分のことが良く見えるようになり、その結果相手とのつながりを確実に持てるようになってきたことに関係しているに違いない。「共生」を志向して職業も研究分野も社会福祉を選択してきた人生である。新規オープンする研究所が持つカオス状態から新たなエネルギーが生み出されることを期待するとともに、末席を汚さないように十分気をつけたいと思っている。近著は以下。

- ・「精神疾患のある人の『ひきこもり』をどう理解し、どう支援するのか」、『月刊ぜんかれん 2004年6月号』全国精神障害者家族会連合会、2004
- ・『『社会的ひきこもり』問題の所在と構造～家族相談事例の分析とヒアリング調査をとおして～』、愛知県立大学文学部社会福祉学科『社会福祉研究・第7巻』、2005
- ・「ひきこもり」、竹中・長谷川編著『新・子どもの問題ケースブック』中央法規、2005
- ・『『分離論』と『一体論（統合論）』を超えて～民主的行政運用を確保できる環境整備を～』『賃金と社会保障 1399号』旬報社、2005
- ・「生活保護制度『改革』と相談援助活動」、『精神保健福祉 62号』日本精神保健福祉士協会、2006
- ・「社会福祉援助とセルフケア～『援助』の連鎖を手にする事の大切さ～」、『知的障害福祉研究さぼーと 584号』日本知的障害福祉協会、2005
- ・『『社会的ひきこもり』支援の現状と課題～A県下の保健所調査をとおして～』、愛知県立大学文学部社会福祉学科『社会福祉研究・第8巻』、2006
- ・『『自立』を迫る社会と若者の生きづらさ ～政策的『自立』の社会的克服～』、『現代のエスプリ No. 483 青年期自立支援の心理教育』至文堂、2007
- ・「居場所を持っていますか？～共に希望を手にして生きる～』、『湧 245号』地湧社、2007